



自然と
人生
荒垣秀雄





自然と
人生
荒垣秀雄



講談社

荒垣秀雄（あらがき・ひでお）

明治36年岐阜県神岡町に生まれる。大正15年早大政経卒、東京朝日新聞社入社。社会部長、リオデジャネイロ、マニラ各支局長、戦後論説委員。「天声人語」執筆17年余。昭和38年退社、論説顧問42年辞任、朝日新聞社友。

現在——日本自然保護協会会長、国立公園協会理事、国立劇場評議員、緑の地球防衛基金顧問、緑の文明学会顧問、日本さくらの会常務理事、東京都緑の倍增推進会議委員、自然公園美化管理財団理事、朝日森林文化賞審査委員、サンワみどり基金理事、観光資源保護財団評議員、明治村評議員、日光杉並木街道保存委員、山本有三郷土文化賞選考委員ほか。第4回菊池寛賞（天声人語）、勲二等旭日重光章（昭50）、日本ペンクラブ名誉会員、岐阜県神岡町名誉町民、東京都名誉都民、プリンスランド・ゴルフクラブ名誉理事長。著書——『天声人語』（朝日文庫）、『荒垣秀雄 ザ・コラム』（角川文庫）、『季節の余白』『自然』『国栄えて山河ほろぶ』ほか多数。80歳以後の本は「あとがき」に記す。

自然と人生

定価1300円

昭和62年10月20日 第1刷発行



著者——荒垣秀雄

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03) 945-1111 (大代表)

編集——株式会社 講談社出版研究所

代表 山本康雄

〒112 東京都文京区小日向4-6-19 共立会館

電話 東京 (03) 943-2613

装幀——松本 達

印刷所——信毎書籍印刷株式会社

製本所——株式会社黒岩大光堂

© Hideo Aragaki 1987

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-06-203544-8 (0) (研)



自然と人生



荒垣秀雄

講談社

装幀・松本達

目次

神はなぜ樹木に長寿を与えたか

7

歴史を見てきた老樹／二千五百年のセコイア樹／屋久杉の日本一／千年の木も新緑で花が咲く／樹木は動けない／動けぬ代りに長寿と花を／植物は他の生物を食わない／植物は全身を生物に与える／植物が減びたら万物は減びる

秋祭と日本人の心

23

ミレ一の「落ち穂拾い」何のこと？／各地の名物秋祭／故郷の祭／四神旗の古い伝統／「神にぎわい」から神宮外苑／神人共食の直会／諏訪の御柱祭／国譲りと「幽閉のシンボル」／インディアンに助けられた巡礼始祖

紅葉の美学と魔法

39

万葉集にはない菊／吉川英治の人情菊／柿の秋色／子規の柿、三成の柿／独歩と蘆花の武蔵野／雑木林と江戸の炭／雑木林は木炭と共に消えた／落葉は別離のドラマ／日本の紅葉は世界一美しい／氷河は植物を滅ぼした／日本列島の氷河は軽微で助かった

師走の幻想

61

月日の立つのは／暦のない豪華カレンダー／古代ローマの勘定日から暦／週一日休みは人間の英知／郷愁の「日めくり」暦／フランクリンの「貧しいリチャード暦」／リチャード暦の格言集／忠臣蔵：大石の遊興は社用族か／遊興の金の出どころ

「正月」は古事記・日本書紀から

81

「正月」は古事記・日本書紀から／中国では三千年も前から／正月以外は呉音と漢音の混用／女房どのの寝正月／兎と月／野兎の耳の情報力／因幡の白兎伝説と多民族性／卯どしのVIPと美女／和服・きもの気分／天皇さま紋付姿見せて下さい

正月の自然と人生

105

なぜ新年を寒い冬に／西洋の一月は双面神の月／門松／雪の美学／『北越雪譜』／明治の雪・天平の雪／積雪の最深記録は二月／春隣り

雛祭・春彼岸・螢の光

119

お雛様のなかった子規・芭蕉／雛人形で貧富を幼な心を知る／春彼岸の寒暖／約束たがえぬ春の草花／北帰前、鴨さんのパフォーマンス／鴨弾奇談／濃艶な鴨の愛情／螢の光で勉強は高くつく／卒業とは思って上がり／‘Commence’ ‘Graduate’ は謙虚／大学生の無知な珍語集

春の回し舞台 梅から桜へ

141

梅と桜は民族性の両面／万葉の梅・古今集の桜／自花不結実／蟻か・蟬と・ロゼット／桜の復興／桜の品種
二百四十余／花吹雪／根尾の淡墨桜／継体天皇／起死回生の根接ねつぎ

春惜しむ

157

春寒・花冷えと万太郎／桜餅／花鳥残雪の自然暦／春田打つ／辛夷・沈丁花／ひえつき節／春眠・春風／
春の蝶・春の月

母の日・こどもの日の哀歓

171

母子スキップに父はかなわぬ／後妻の継母と遺産問題／中国残留孤児の母の苦悩／姑は嫁の母か／
母の発音は世界中がM／こどもは未来だ／"こども喪失"のいじめ／過疎村に子どもの声はない／教育の
普及はローカル赤字線のお蔭／鯉のぼりは天才だ

郭公は一息に百回も鳴く

189

黒船と愛鳥条約／燕は六千六百億匹の虫を食う／ほととぎすの鳴き声／郭公は一息に百回も鳴く／里親
制度の時鳥、郭公、筒鳥／雀は"無罪"になった

梅雨の花

203

安心して飲める日本の水／梅雨詠歎／一ミリの雨と日本列島／湯水の如く浪費する／紫陽花とシーボルト／
「先代萩」の花／卯の花と蚕の繭

お盆の哀歎

219

ふるさとが近くなる盆／精霊と瓜の馬「茄子の牛」／田舎の墓参り風情／あわれ原爆忌のうた／分割占領を免れた幸運／敗戦忌の歌と風化／稲妻はなぜ「稲の妻」か

登山の逸話と教訓

239

日本の夏、ヨーロッパのサマー／雑草がないー和辻哲郎の驚き／夏はなぜ暑いかー太陽／マナスル隊・別れるテント清掃／莫大な搜索費のツケ／浦松さんの「登下山」哲学／槇さんと嘉門次／キャンプ焚火の合唱・野生の迷惑／大沼の遭難と猪谷六合雄翁／エヴェレスト「征服」に非ず「登頂」

知床は泣いている

257

知床は怒っている／赤いテープの巨木五三三本切る／歴史を切り倒す／切つてよい理屈のウソ／国有林の切り売り／支障木も大量に切られた／一万本切つて森の若返りとは／百平方メートル運動の隣りで伐採／自然はカムイ（神々）とアイヌの信仰／知床半島全体を保護せよ／知床を遺伝子保存の宝庫に

ふだん着の自然街路樹

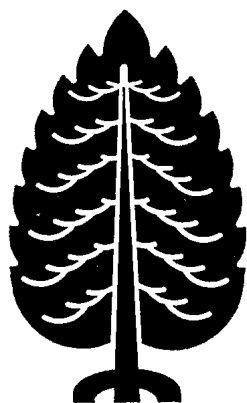
277

神様と人間の共同作品／長安の踏槐並木／釈迦と沙羅双樹／天平の果物並木／東海道松並木／日光杉並木／銀座の並木の今昔

あとがき

292

神はなぜ樹木に
長寿を与えたか



歴史を見てきた老樹

私はでっかい木が大好きで、老樹巨木を見ると礼拝したいくらいになる。山奥で老巨樹を見ると神韻縹渺として頭の中がシーンとする。街路樹にも公園にも大きいのがあるし、神社やお寺の境内には村一番の長寿の大木がそびえている。

私はそんな老樹巨木にありと、しばらく立ちどまって仰ぎ見、太い幹にしがみついて両手で抱えてみたり、手で幹をピタピタたたいてみたりする。幹に耳をあてて何か独り言をつぶやいていないか聴いてみたりする。そんな格好を人が見るとアタマがヘンなのじゃないかと怪しまれるので、散歩の折など人のいない時に街路樹と遊ぶことにしている。

杉・銀杏・樺・樟・椎・松・榎・桜・ユリノキなどの老木をとらえて、「キミ、いくつなの？ 還暦か・古稀か・喜寿・傘寿さんしゅくらいかな」と聞いてみる。「もうちょっと年上です」「じやあぼく（八十三）よりだいぶん兄貴だな。米寿白寿にもなるの？」「いいえ、もっと上です」「百歳以上か、すごいなあ」と感嘆する。

明治維新を見てきたなんていうのはザラにある。あれからまだ百二十年だものね。家康を知ってます、なんてのもある。関ヶ原役が一六〇〇年だから、樹齢三百何十年なんて樹木は多いものねと納得する。

清盛も頼朝も源平合戦も見てきました、というのもある。壇ノ浦の平家滅亡が一一八五年だから、樹齢八百年余の樹木なのか。天然記念物にはそんなのザラにありますよ、だと。

イエス・キリストだってまだ二千年にならない。西暦紀元前からの樹齢二、三千年という長寿の木は世界じゅう各地にある。樹木とはまことに不思議な生きものである。

二千五百年のセコイア樹

私は世界一長寿の木も、日本で一、二という老木もこの目で見てきた。幹に抱きついて木肌に直接触れてきた。昭和四十八年夏アメリカの国立公園を視察に行った時、七月六日カリフォルニア州セコイア国立公園のジャイアンツ・フォレスト（巨樹林）で樹齢千年以上のセコイアが約二万本もある中に、いちばん長寿のジェネラル・シャーマン・ツリーを見た。木の高さ八

十二・九呎、根元まわり三十一呎、目の高さの幹囲二十四・一一呎、直径十一・一呎。樹齡は三千五百年といわれたが、科学的な精密調査の結果大幅に短縮されて現在の樹齡二千五百年であと千年は生きると推定された。牧野富太郎博士はセコイアをもじって「世界爺」と命名したが、さすが王者の貫禄だった。この木は丸ビルの高さ（三十一呎）のところから下枝が出ており、その第一枝の太さが日光杉並木（平均樹齡三百年）の幹くらい。仮りに根元の所で切断すると断面の広さが日本式にいうと二十八坪、五十六畳敷き、八畳間が七つとれると仲間の算数好きが計算してくれた。一行が両手をひろげて手をつなぎ抱えたら十七人でとどいた。アメリカ人が立ち並んで七十人との記録もある。容積五万立方呎（メートル換算略す）。ギネスブックによるとマツチ棒なら五十億本とれる勘定。重さは推定二、一四五トとある。

屋久杉の日本一

屋久島の屋久杉視察には二度行ったが、大王杉に見参したのは昭和五十三年十一月二十三日だった。宮之浦岳（一九三五呎）をよじ登り、樹齡二千年内外とされる夫婦杉、万代杉、翁

杉、仁王杉、ウィルソン株を見たあと標高一二〇〇呎で大王杉にたどり着いた。樹齡三千數百年といわれ、高さ四〇呎、根回り二五呎、目通り幹回り一二・六呎、幹の胸高直径四呎、私と同行の島の青年六人が両手をつないでようやく抱えられた。

屋久杉の最長老は縄文杉だとされ、樹齡なんと七千二百年といわれていたが、私はそこまでは行かれなかった。講演の時間に遅れるからだ。縄文杉は胸高幹囲一六呎、幹の胸高直径五・一呎、根回り四三呎という巨大さだ。ところが昭和五十九年に環境庁の総合學術調査で屋久島が六千三百年前に火山爆発で全島の動植物が火砕流で全滅したと報告され、樹齡七千年の説は崩れた。さらに学習院大学の放射性炭素による年代測定で株の部分の最も古い年代値が二千七百七十年と出た。何本かの杉がくっついて一本となった“合体木”ではないかと推定されるにいたった。だとすれば大王杉の方が長寿一番となり、私は日本一の長寿の樹木と親しく会見したことになる。

千年の木も新緑で花が咲く

樹木だけがなぜこんなに長生きするのだろうか。造物主の神様はなぜ植物の樹木だけにこんな特別の長寿を与えたのだろうか。

日本は世界一の長寿国だというが、平均寿命は男七十四・八四歳、女八十・四六歳だ（昭和六十二年七月の発表では男七十五・二三歳、女八十・九三歳）。米寿や白寿まで生きる人は少ない。百歳を越した有名な人は故北村西望翁（百二歳）、故平櫛田中（百七歳）くらいで、日本一の最長寿だった泉重千代翁は満百二十歳二三八日で昭和六十一年二月二十一日に死去された。樹齢千年二千年の老樹にくらべたら、人間の生命なんて「露のいのち」みたいなものだ。人間以外の動物——鳥獣虫魚もみなそうで、とても樹木の長寿には足元にも寄りつけない。

しかも樹木は千年の老樹になっても毎年必ず新緑が萌えて若木のごとく若返り、花まで咲かせる。花が咲いて実を結び、千年の老樹もちゃんと子孫をつくる能力を持ち続けている。

人間も動物も老いると老衰するばかりで老醜となり、まして子孫をつくる生殖能力なんかない。樹齢何百年、千年の老樹は幹にコブができ洞穴があいたりするが、大きく枝葉を張って鬱蒼と繁り、堂々たる長者の姿になり、神韻縹渺たる風格さえ備えてくる。老醜なんて哀れな姿ではない。ボケ老人にもならない。若木と同じ美しい花を咲かせ、色気たっぷりの艶姿でさえ

ある。インポテンツにもならず、子孫繁栄のお役目も果す。樹木の長寿ぶりは神秘というほかない。

樹木は動けない

神様が万物を創った時に、一つだけ「これは不公平だったな」とあとで気がついた。それは生きとし生けるもの、すべての生物は「動くもの」にしたが、植物だけは「動けぬもの」にしてしまった。動物はすべて歩き、走り、自由に動き回ることができる。鳥は空を飛び、魚は水の中を泳ぐ。

ところが、植物、樹木は動けない。一粒の種子が地に落ちて芽を出したら最後、一生涯そこを動けない。自ら根を張って大地に自縄自縛^{じじょうじばく}し、その場所から他へ移動することはできない。天地はこんなに広大なのに、樹木は歩くことも走ることも飛ぶことも泳ぐことも出来ず、百年でも五百年でも千年でも宿命の地にじっとして移動できない。声を出すこともできず、鳥のように鳴いたり獣のように吼えたり、人間のように泣いたり歌ったりすることもできない。これ

は他の生物と大変な違いだ。生きものとしてこれほど不自由なことはあるまい。

動けぬ代りに長寿と花を

そこで神様も考えこんだ。一生動けないことにしたのは不公平だったな。さぞつらいことであらう。これは何とか埋め合せをしてやらなくてはなるまい。そうだ、うんと長生きさせてやろう。好きなだけ百年でも三百年でも千年でもよい。二、三十年か五十年で結構ですと遠慮する木は別として、希望者には人間の十倍も二十倍もの超長寿を与えた。

神は「動けぬ樹木」を憐れみ給い、木だけの特権として先ず長寿を与えただけでなくその上に二つのおまけまでつけた。一つは、死ぬまで毎年必ず一度は新緑に若返らせることだ。ただ長生きだけで、人間や動物のように老いさらばえていくのではつまらない。どんなに老樹になっても、春になれば新芽を吹いて新緑の姿に若返らせることにした。それは落葉樹だけでなく、常緑樹でも目立たないが古葉を落して若葉へと新陳代謝させている。

さらにもう一つおまけをつけて、死ぬまで毎年「花が咲く」特権まで与え給うた。千年の老